

クラスで浮いている

女の子と仲良くなったら

なんでもしてくれる

ようになっただので

ピンクゲート

オナホにした。

体験版

小川直樹

cover illustration



クラスの浮いている女の子と仲良くなったら
なんでもしてくれるようになったのでオナホに
した。

原作：小川直樹／illustration：

目次

女の子と話をするようになるためのきっかけ
きっかけを次に活かす
コミュ症になるにも訳がある
腹が膨らむと眠気が来る
2度目の食事と膝枕
つけ込まれやすい娘にはつけこむべし
朱里は実は……
孝弘の指導方針とセクハラ方針
土曜日は記念すべき日になる
お仕置きと称してアソコをいじる
全裸に剥いてしゃぶらせて
いざ初体験!
恋人になつてと言おうとはした
ゲームをしよう
罰ゲームに奉仕を教える
期末テストの最後の準備
勉強していない時
テスト開始!と思いきや
テストが終わった日の2人

朱里ちゃんはエロい娘です

続けて2回戦

お仕置きできるかな

お風呂でおしっこタイム

インターバル

潮吹きさせたいのでやってみた

お風呂でハッスル

テスト休みはやりまくり

朱里ちゃん、オナホになる



女の子と話をするようになるためのきっかけ



さとむらたかひろ よしながあかり

里村孝弘が吉永朱里と初めてまともに会話をしたのは、高校に入学してから2か月近くたった5月の終わり頃だった。

それまでは同じクラスの同級生という以外には接点はなく、お互いに「顔と名前に覚えがある」程度の印象しか残っていないそんな希薄な関係でしかなかった。

孝弘はゲームやマンガにアニメが一番の趣味といういわゆるオタク系の男子で、交友関係ももっぱら同好の志が中心であり、あまり積極的に交友の輪を広めようという気もさらさらない。

朱里はコミュ症のため高校に入学してからもクラスの女子の輪に混ざることができず、休憩時間などは教室の自分の席で静かに読書しているのがすでに当たり前になっていた。孝弘から見た朱里はクラスに馴染めずにいる根暗そうなボツチ女子である。

そんな2人であったがある日接点ができた。

「あれ？」

孝弘が放課後の帰宅時に道に落ちていた生徒手帳を拾ったのだ。

さすがに自分を通してある学校の生徒手帳を見つけてしまったのは知らない顔もし辛く、少々面倒に思いながらも中身を確認すると同じクラスの生徒の物であることがわかった。

その時点で孝弘には二つの選択肢があった。一つは道に戻って学校の職員室にでも届けること。もう一つは直接家まで届けることだった。

同じクラスといっても相手はメアド等の連絡先も知らない女生徒である。この場合の模範解答は学校に戻る方だろう。

しかし生徒手帳に記載されている住所は孝弘の住んでいるアパートの近くと言って良く、ほとんど帰り道の途中だということがわかると孝弘は直接届けることに決めた。

これはそれほど深い理由があった訳ではない。すでに校舎を出て数分。ここからまた戻るのも面倒だなと思ってしまったことや、ひょっとしたら途中で生徒手帳を落としたことに気づいた持ち主が引き返してくるかもしれないと思ったからだ。

「ここだな」

住所さえわかっていたればスマホ世代にとっては辿り着くのは難しくない。けっきょく途中で落とし主と遭遇することもなくクラスメイトの住んでいるだろうアパートの前までやってきた。

部屋番号や名前を確認しながら2階の隅に『吉永』という表札のかかった目的の部屋を発見した。

ピンポーン。オーソドックスなインターホンの音がドアホンから聞こえた。

「……………」

しばらく待っても出てこない。

ピンポーン。もう一度鳴らす。

「……………」

出てこない。留守だろうか？ だったら生徒手帳は郵便受けにでも放り込んで帰ろうかと孝弘が思った時だった。

ガチャリ、と鍵が開く音がし、ゆっくりドアが開いた。

「……………あ、あの、えと、ええっと……………な、な、な、なに……………？」

出てきたのは制服姿の孝弘とは違い、すっかり部屋着に着替えてさらにエプロンまでつけた少女だった。きよどりながら視線があちこちに乱れているのがいかにも重度のコミュ症である。

「……………」

この時、歳相応に孝弘は緊張してしまっていた。

親しくもない相手の家を訪ねるといふ慣れない行動のせいもあるが、現れた少女——朱里の姿にドキリと鼓動が早まったからだ。

朱里の身長は百七十手前の孝弘よりも幾分低く百五十センチ台だ。女子としては平均的な方だろう。クラスで見かける姿は前髪で目元が隠れるようにしているが、それが大人しいイメージと相まって根暗な印象が強いだけの少女にすぎなかった。

しかし今は前髪を上げて髪留めで止めており、普段髪に隠れている目もよく見えた。それだけでもずいぶんと印象が違ってくるものだが、さらに初めて正面から見据えたその整った顔立ち、漫画などに毒され審美眼の厳しい孝弘をして美少女と呼んで異論がでよう筈もないと断言できるほど可愛らしいものだった。

「……………あえっと……………あのー、俺、吉永さんと同じクラスの里村だけど……………」

「う、う、うん……………」

どもりがひどく緊張が見える朱里とは裏腹に、ここで全く知らない人のような反応をされなくて良かったと孝弘は少しだけ落ち着いた。

「えっと、これ拾ったから」

そう言って生徒手帳を見せた。

「え……………!? ど、どっこ、どっこで、お、落としちゃったんだろ……………?」

「商店街の前あたり。わりと端っこの方で落ちてた」

「あっ、ああ、お財布、だ、出した時だっ」

朱里は顔を真っ赤にして当時の状況を思い出した。商店街で買い物する前にこそそと隅の方に寄って財布の中身を確認した時に落としたようだ。

「誰のか調べるために中見ちゃったけど顔写真張ってあるところだけだから、その、とにかく、家近くみたいだったから届けに来ただけだ」

「あ、あうあうあ、あ、あり、ありがとう……えっと……」

「里村だよ」

「あ、あり、ありがとう、さ、里村君……」

生徒手帳を受け取るとちよこんと朱里は頭を下げて礼を言った。

「うん。じゃ」

それを受け、さあやるべきことは終わったから帰るか、と孝弘が若干のもったいなさを感じながら帰ろうとした。

「あっ、あっ、あの、おお、お礼っ、お礼を何か、何か、し、しないと……！」

そう呼び止められ意外と律儀だなあと孝弘は思った。しかし金銭的な価値などほとんどない落とし物を届けただけである。たいした手間でもなかったし、口頭の礼で十分だ。

「いやいや。別にいいよ」

「で、でで、でも……」

「それより、良い匂いしてくるし何か作ってる途中だったんじゃないのか？ 火とか大丈夫？」

「だ、大丈夫。もう、け、消してるし、ほほ、ほとんど、出来上がってる、から」

「ふうん」

つい鼻をひくつかせて匂いを嗅いだ。漂ってくるのは御菓子などの甘い匂いではなく醤油や味噌の匂いだった。時間から考えても夕飯だろう。

「吉永さんご飯自分で作るんだな。ちよっと意外だった」

言われた相手次第では「意外とはどういう意味だ!？」とすぐまれそうな一言も付け加えてしまったが、幸い朱里は悪い風には捉えなかったらしい。

「う、うん。わ、私、1人暮らし、だし。できるように、が、がんばった……」

「……あのさ、余計なことかもしれないけど、女の子の1人暮らして物騒らしいから、あんまり簡単にそういうこと教えない方がいいぞ?」

「うえ……っ!? あ、ありがとう、き、気をつけます……」

「ああ。でも偉いな、ちゃんと料理するのって。俺も今は1人で暮らしてるけど、ほとんど惣菜とかですませちゃうもんな。料理もたまにするけど、自分だけの分作るのってけっこう面倒じゃないか?」

「わ、私、お料理、す、好きだから……」

「へえ」

「……」

「……」

会話が途切れた。ずっとテンパっている朱里はもとより孝弘とて女子と話をするのは緊張する。なにしろ普段会話するのはオタク仲間ばかりだ。

気楽に趣味の話題に興じるのは全く違い、異性相手というだけで話題に困る。

マンガとかだったらどんな話を振るのかな、なんてことも考えたが、一旦話題が切れるとそこから無理に会話を続けようとするのもいかにも意識しているようで駄目に思えた。

「えっと、じゃあ——」

「ま、待って。ちよちよっと、ま、待ってて……!」

「え?」

再度帰ると言いだそうとした孝弘を制して朱里は奥へと小走りに駆けて行った。待てと言われてこのままいなくなるのも悪い。玄関が開きっぱなしであるので閉めれば良いのに不用心だなと

思いながら孝弘は覗ける範囲で屋内を観察した。

玄関からはまっすぐ廊下が伸びていて左右にドアが2つずつ。朱里が向かった奥がリビングキッチンだろう。

女の子の家と思うと色々飾り付けてあるイメージがあったが、花瓶に花が活けてあったり絵が飾ってあったりということもなく殺風景でさっぱりしていた。

4つのドアのうちの2つはトイレに風呂だろうから残り2つが個室かな、どこが吉永さんの部屋なんだろと、あまりじっくり覗くべきじゃないとは思いつつも手持無沙汰であったのでついついそんなことを考えてしまう。

そうしているとようやく奥から朱里が戻ってきた。

「さ、ささ、里村君っ、よ、良かったら、これ、た、食べて……」

そう言って朱里は四角いタッパーを差し出した。ぼんやり中が透けて見えて何かしらの料理が入っているのが孝弘もわかった。

「その……さ、里村くんも、ひ、1人暮らして、さ、さっき、言ってたから……」

「え、いや……いやいや、そんなの悪いよ」

孝弘が料理の手間を惜しんでいるという話を聞いて、こういう礼なら喜んでもらえると思ったようだった。

まるで漫画のラブコメみたいな展開だと内心嬉しく思いながらも、しかし孝弘は遠慮の言葉を口にした。拒否とかではなく、どちらかというの様式美のようなもののもりだった。

「あ、あああああ、ああの、ご、ごご、ゴメンなさいごゴメンなさい……！ わ、私が作ったのなんて、た、食べたくないよね……。ふ、不愉快なことし、しちやって、ゴメンなさい……」

「うあいやちよちよっ、待って落ち着いてっ。嫌とか不愉快とか全然そんなことないからっ。むしろすごい嬉しかったからっ。ただ本当にそんなお礼されるほどのことしてないのに悪いなって思ってたただけだからっ」

「……ほ、本当……？」

「うん、本当本当。嬉しい、すごい嬉しい。あー、ありがとう吉永さん」

予想外にシヨックを受けてしまった感じの朱里の様子に孝弘は慌ててフォローを入れる。これは迂闊な反応はできないぞと笑顔を作ってしっかりタッパーを受け取った。

「え、えへへ。じゃあ、その、せせ生徒手帳、届けてくれて、あ、ありがとうございました」

「こっちもありがとう吉永さん。これ夕食に頂くな」
改めて礼を言い合い、そこで2人の初めてのまともな会話は終了したのだった。



「吉永さん、あんな可愛い子だったんだなあ」

孝弘はこの春から越してきた安アパートに帰宅し、顔をニヤつかせながらさきほどのやりとりを思い出していた。

最初は面倒に思った落とし物を拾った事も今ではとてもラッキーなイベントだったと思えた。

ゲームや漫画・アニメが好きなオタクといえども思春期の男の子。異性にはしっかりと興味がある。とか本当はダメだが十八禁なゲームや漫画に動画も嗜んでいるぐらいだ。可愛らしい少女と会話できただけでも飛び上がりたぐらいに気分が高揚する。それが一期一会の相手ではなくこれからいくらでも接点を持つようなクラスメイトであるとなれば尚更今後の関わり方を夢想できてしまう。

そういう意味ではお礼の料理をタッパーでもらえたのはとても良かった。使い捨ての紙容器とは違い、タッパーなら洗って返却するのが当然だろう。次の接点を持つきっかけとしては十分だ。

「でもあんなにきよどりながらけっこう押し強かったな、吉永さん。ひよっとして俺のこと……好きだったとか？」

年頃の男の子である。朱里が孝弘の名前すら覚えていなかったらしいことはすっかり忘れて気持ちが舞い上がっていた。

これで相手が学校の人気者、高嶺の花とかであれば孝弘も身の程を弁えるぐらいの分別はついていて、幸い朱里はクラスから浮いた存在であり、恐らく誰も今日までの孝弘同様に彼女がとても可愛らしい美少女であることに気づいてすらいない。その事実は明確なアドバンテージである。

孝弘も今日のやりとりだけでいきなり好きになったという訳ではないが、可愛い女の子と仲良くなれる可能性というのはそれだけで胸を高鳴らせてくれた。

きっかけを次に活かす



「は、は……。ビックリした」

孝弘が帰り玄関を閉めた後、朱里は胸を抑えて深呼吸を繰り返した。

「久しぶりに家族以外の人とあんなにお話ししちゃった……。私、変なこと言わなかった、よね？」

会話内容を思い浮かべると、まずどもりまくっていた自分に恥ずかしくなり、次に孝弘とのやりとりの一つ一つが正解だったのかどうかで一喜一憂する。

最後に料理を渡したのはどうだったのだろうか。「美味しくなかった。貰って損した」って思われたらどうしようなどと考え悶々としてしまう。

「う……、う……っ、大丈夫かなあ？ でも里村君優しそうだったから、きっとそんなこと言わないよね？ あ、そだ」

何かを思い出して自室に駆けこんで取り出したのはクラスの生徒名簿だった。昨今の個人情報保護に乗っ取って書かれているのは生徒の名前ぐらいのものだが、それを見て朱里が確認したのは孝弘の名前だ。

「……里村、孝弘」

じっと見る。指で字を書いてみる。これは名前を記憶するための行為である。

実は口頭では今まで「さとむら君」であり、漢字でどう書くのかが不鮮明だったので確認したのだ。そう難しい漢字ではないがそれでも間違えて覚えてしまうのは不味い。それに苗字だけでなく名前も憶えておきたかった。

「っと、うあ……これ、みっともなかったんじゃ……」

ふと朱里は鏡に映っている自分の姿を見て動揺した。普段学校に行っている時とは違う姿を見せてしまった。特に前髪をあげているのは孝弘にどう映っただろうかと不安に思う。また、髪がはねているような気がしてペタペタ頭をおさえたり枝毛が急に気になった。

「里村君、また話しかけてくれるかな……？」

不細工な女だと思われるもうこりこりだと感じていないだろうか、などといったマイナスの思考が渦巻きだして少し昂っていた気分が逆に落ち込んでいく。

「……もしもお料理気になってくれたら、友達になってくれたりとかするのかも……」
そんなことも期待してしまったからである。

朱里が入学した高校にはそれまでの知り合いが1人もいない。親元離れ、あえて知り合いのない高校に進学したから当然だった。

新天地で友達を作ろう、朱里はそんなささやかな願望を持ってその高校に入学したのだが、しかし未だ1人も友人と呼べる相手ができていなかった。

もともと地元の幾つかの中学校以外から人が集まるような高校ではない。つまり入学してくる生徒たちはすでにある程度顔見知りや友人がいて最初からグループができあがっているのが当たり前だった。もちろんそこに新たな出会いと交流も生まれるのだが、朱里はそれに乗ることができなかつた。

最初期こそ朱里に声をかけてきてくれるクラスメイトの女子は何人もいたが、コミュ症をこじらせて満足にコミュニケーションをとることができず、自分から積極的に仲間に入ろうと動くこともできず、結局どこのグループにも入ることができずに今に至っている。

朱里は本来友情を育みやすい同年代の同性に話しかけられた時こそが最も緊張してきよどつてしまい、まったくもって満足に話すことができなかった。人によっては朱里が話し終えるのを急かさず待って会話を続けようとしてくれたりもしたのだが、そんな時も朱里の方が逃げたくなくて会話を切ってしまうおうとしてしまい、それで相手は離れていってしまった。

「友達、欲しい……」

好んで孤独でいる訳ではないのだ。

しかしどうしても自分が相手からどう見られているのか、自分の言動にどう感じるのか、などといった反応が気になりすぎてしまう。恐怖を感じると言っても良い。

それが良くないことだと思いつつも自分から動くことができないことがもどかしくもあった。

「またお話しできるかな……ダメかな……？」

孝弘との会話は朱里の中ではこしばらくで最もまともにできた会話だった。

それは孝弘が男だったからというのものもあるし、ここが彼女の家で逃げ場がなかったことや、孝弘が落とし物を届けにきてくれたことで、とにかくお礼を言っていれば良いというところへの対応が限定されていたからだろう。

自分から話しかけるのは難易度が高すぎるためどうしても相手頼りになってしまふ。

だから朱里はその日からまた孝弘が話しかけてくれることを期待しながら過ごすようになってしまった。



孝弘から話しかけるきっかけとなる物はある。料理を入れた容器のタッパーの返却だ。

翌日さっそく孝弘はそれを朱里に返そうと思った。ただ、どんな風に返せば良いのかで悩んでしまった。

「おおい里村、さっきからちらちらどこ見てんの？ あっちになんかあるのか？ あれ、ひよつとして女子の方見てた？」

「違うって。そんなんじゃないよ」

一応学校にも洗ったタツパーを持ってきたものの、それを級友が見守る中で返すのは色々と勘繰られそうで勇気のいる行為だ。

同じクラスの友人Aから指摘されたことで朱里を意識していたのがバレそうになり、ごまかしつつもこれは校内で返すのは無理だと諦めた。

「そういえば里村。俺さ、発売したばっかのあのゲーム昨日帰ってからすぐやり始めたんだけど、出だしっからすごい出来良いぞ。おおっとなった」

「え、マジか？ なんかPV見てたら微妙っぽかったからどうかと思ってたんだけど……」

「いやいやマジよマジ。ストーリーはまだなんとも言えないけど、雰囲気がすごい良い。あと女の子が可愛い。声優もベストマッチ。これ大事」

「へえ。じゃあ俺も買おうかな？ でも他にも積んでるゲームあるしな」

「絶対買えって！ 俺の勘だとあれ多分しばらくたっててもそんなに値崩れしないと思うし」

「ふうん、そっか。まあでも今やってるの終わってからだな」

などと友人と会話しつつも、頭の中では朱里にどうやってタツパーを返そうかと考えていた。

「……………来てしまったけど、いいのか…………？」

悩んだ末に孝弘は朱里のアパートに再び足を運んでいた。校内で返せなかった以上は他に選択肢がなかったのだが、それでも仲が良い訳でもない1人暮らしをしている異性の家に、招かれてもいないのにやってくるというのは図々しいのではないかとも思った。といってもすでにここまで来たのだからこのまま帰ってはそれこそバカだろう。

ピンポン。

インターホンを鳴らす。

「……………」
変な顔されたらどうしよう、などと思いつつ待つも朱里は出てこない。

一応は放課後朱里が先に学校を出たのは確認している。友人もおらず部活にも入っていない朱里は基本的に授業が終わればすぐに帰る。孝弘も似たようなものだが、まだ誰かと駄弁ってから帰ることも多く、今日もそんな感じでしばらく時間を潰してから帰宅途中だ。

ピンポン。

もう一度鳴らす。

「……………」
そういうえば1人暮らしなのだから食材の買い出しなども朱里がしている筈だ。昨日も商店街に寄っていたと言っていた。今日もそうかもしれないならまだ帰っていないかもしれない。

「……………」
帰ってくるのをこのまま待つということはさすがにできなかった。

仕方ないのでタッパーはビニール袋に入れて玄関のノブに吊り下げて帰ろうと思った矢先。
ガチャ。扉が開いた。

「……………」 さっ、ささ、里村、君……………」

「……………」 よお。その、いたんだな。吉永さん、まだ帰っていないかと思った」
「ご、ゴメンなさい。出てくるの、あの、お、遅くて……………」

相変わらずおどおどしている朱里は扉に体を隠し、顔を伏せながら謝った。この様子だとたぶん誰かが尋ねてきた時はいつもこんな感じなのだろう。人前に出るのに躊躇してしまうのは見えないればわかる。

「そ、それで、今日は、あのその、な、ななんで……………」

「あー、えっと、これ返しにきただけだから」

「あっ」

袋に入ったタッパーを受け取ると朱里は驚いた表情になった。しまったという表情だ。

「ご、ゴメンなさいっ。わ、私、わざわざこんな手間かけさせちゃって……！ す、すて、捨ててくれて良かったのに、わざわざ返しにこさせて、そのごめ、ゴメンなさいっ」

「え？ いやなんで吉永さんが謝るんだよ。こんなのぜんぜん謝るようなことじゃなくて、えっと、料理美味しかった。ありがとう。学校じゃ渡し辛かったから寄らせてもらったけど迷惑だったらゴメンな」

「め、迷惑だなんてそ、そんなっ。よよ、喜んでもらえたのなら、よ、良かった、です……」

「あー……うん」

朱里がなぜか恐縮しているのに困惑しながら孝弘は自分の失態に気が付いた。タッパーを返す時、自分も何かお返しに料理なり御菓子なりを詰めて返すというのも良くある返礼というやつだ。今更ながらにそうすべきだったと思った。

そういう気が回れば、返礼に対する返礼のようなやりとりが繰り返されて自然と関係が続いていったかもしれないのに。

「……えっと、じゃあ返したから帰るな」

「あっ、まま、待って……！」

「え？」

孝弘が聞き返すも朱里はさっと奥に引っ込んでしまった。昨日もこんな感じだったなと思いがらしばらく待つ。再び現れた朱里は取っ手のついた紙箱を孝弘に差し出した。

「そ、その、よ、良かったら……食べて。こ、これ、その、お、おかずにはならないけど……」

紙箱は中の物が見えないが、その容器は孝弘も知っている洋菓子店の物だった。中身はケーキだとかそういったお菓子の類に違いない。

「あ、あのもし甘いものきき、嫌いだったら、す、捨てちゃっていいから……！」

「あえっとー……いやうん、甘いものもすごい好きだから嬉しいや。ありがとう吉永さん」
ただでさえ昨日と違い何かを貰う理由も無いのに、さらに値段はわからないが買ったお菓子のようだ。となると尚更遠慮すべきじゃないのかと思いつつ、朱里のこれまでの反応からまた自分が悪いかのように謝る姿が想像できて受け取っていた。

「え、えへへ……」

それに渡した方が嬉しそうに微笑んでくれるのだ。遠慮したらそれこそバチが当たるだろう。

「じゃあ次は俺も何かお返しするな」

「ええっ、そそそんな、わ、悪いよう……」

そこからまた二言三言そんなやりとりを繰り返してから孝弘は帰宅した。

「吉永さん、やっぱり俺に気があるんじゃないか……？」

家に帰ってケーキを食べながら孝弘はそんなことを考えてニヤつく。

少し相手が親しくしてくれるとすぐに恋愛感情に結びつけたくなる、そんな年頃である。

コミュ症になるにも訳がある



2度の交流があつてから孝弘はずいぶんと朱里を意識するようになっていた。

クラスメイトの目が気になり校内で話しかけることはなかったが、放課後は朱里の動向に気を配って後を追うように学校を出て、家まで押しかけることはなかったものの商店街でそれとなく朱里を探して彷徨う。

少し離れたところには大型のスーパーもあるが、朱里は帰り道にある商店街で食材やそれ以外の買い物もすませる傾向にあった。

孝弘も毎日ではないがたまには自炊する。彼は小学生の頃に母親が亡くなっており、中学生時代には朝晩自分と父親の食事を作っていたので料理はけっこうして苦手ではない。この年代だとかなり得意な方だろう。ただ1人暮らしたと面倒に感じる上、親の目がな分好き放題趣味などに時間をとりたくなって手を抜いているだけだ。

しかし本領に戻れば商店街でそういった物を買うのはけっこうしておかしな事ではない。そういう理由が用意できたこともあり、商品を物色しつつ朱里を見つけては偶然を装って話しかけるようになっていた。

「さ、里村君も、お、お料理するんだね……？」

「たまに気が向いた時だけな」

「どど、どうなの……作るの……？」

「あんまり手が込んだのは作らないけど、父さんが和食派だったからうちじゃご飯炊いて味噌汁つくって魚焼いて、後は適当にサラダ作ったり肉焼いたりとかしてた。シチューとかカレーは数日分まとめて作るから楽しみたい時はよく作ったなあ」

「あうう……わ、私、毎日パンだよ……。ご、ご飯炊いた方がいい、かな……？」

「俺も最近はパンがメインだけだな。炊飯ジャーも用意してないし。米が食いたくなったらレンジで温めるやつ買って食ってる」

「そういうのもあ、あるんだね。私、あ、あの、レ、レトルト？ ……イ、インスタント食品って、あんまり食べないから……」

スーパーで買い物すればレトルト食品などあちらこちらに置いてあるが、この商店街ではそういった物を扱っている店はコンビニぐらいだ。朱里はコンビニでは買い物をしていないので馴染みがないようだった。

「珍しいな。逆にすごいよ」

「す、すごいのかな？ えへへ……」

孝弘が朱里を見つけるのは食材を扱っている店が多かったが、他にも本屋などでも発見するところもある。本屋は昔に比べてずいぶん数を減らしてしまったが、この商店街の本屋は今の時代にも生き残れているそこそこ大きな店だ。ゲームの販売なども行っているので孝弘もたまに足を運んでいた。

朱里は学校で休み時間は常に本を読んでいる。誰からも相手にしてもらえないがゆえの逃げの振る舞いでもある。ただ本が好きなのも確かなので朱里の読書量はかなりのものだった。毎日とはいかないまでもそれなりの頻度で本屋に足を運び読みたい本を探す習慣があった。

「吉永さん、そういう本も読むのか。なんだか難しそうだけど……面白い？」

「こ、これはまだ、読んだことないけど、このさ、作者さんの前の本は、えっと……その……お、面白かった」

具体的にどう面白いかを説明しようとして表現しきれずに諦めた朱里である。

「さ、里村君も、小説、読むの……？」

「ラノベだけたまにな。本は漫画がほとんどだ」

「わ、私、漫画はあ、あんまり、読まないけど、お、おお、面白いのとか、好きなの、あ
る……？」

「そりやあるよ。あー、ゴメン、貸してあげられればいいんだけど、俺、最近はおっぱら電子書籍で購入してるから貸せないんだよな」

「あううあう、そそ、そんなつもりじゃっ。……わ、私、で、電子書籍って、よくわかんないけど……」

「あれ便利だぞ。欲しいの探すのも楽し在庫気にしなくてもいいしさ。タブレットみたいな専用端末なくてもスマホがあればどこでも読めるし。紙に印刷してないのになんでこんなに高いんだよって思うけどな」

「そそ、その辺はその、わ、わかんないけど、えっと、ほ、本屋さんでこんな会話、いいのかな……？」

「……あー。うん、たまには俺も本屋で本買おうかなっ」

間違いなく本屋が廃れていく要因の一つとなった電子書籍を書店内で他の客に勧めるといふ、出禁を食らいそうな愚行に気づいた孝弘だった。

ちなみに電子書籍は紙に印刷しないため原価が抑えられ、さらに在庫を抱える必要もないので紙の本に比べて様々な費用が浮いている。にも関わらず高額なのは紙の本が売れなくなるからというにする配慮であり、これは文化保護のためにも無碍にはできない理由だ。

それはわかるが、紙の本は装飾や紙質、本のサイズで値段が違ってくるものなのに、そんな違いが全くない電子書籍もそれに引きずられて値段が激しく上下しているというのはいささか納得し辛いのも確かである。

そんなこんなで孝弘と朱里は商店街など校外で顔を合わせれば必ず会話をかわすようになっていった。

話しかけるのは毎回孝弘からだったが、朱里もどこかで孝弘に会えないか期待して周囲に視線を配っていて、先に孝弘を見つければそれとなく自分が視界に入りやすいように移動したりと微笑ましい努力をしていたのだった。

話の内容はお互い1人暮らしということもありその苦労についてだったり、学校の授業のことだったり、本やゲームといった趣味についての話だったり。回数を重ねるごとに少しずつ話題が豊かになっていき、それと同時に朱里のどもり方も孝弘との会話においては少しだけマシになっていった。



『朱里ちゃん、最近何か良いことあった？』

「ほえ？」

『何か前より声が弾んでる感じがする。それに学校の話も前はもっと話し辛そうだったし』

「おお……。美奈子ちゃん鋭い、かも」

朱里が夜ベッドに寝転びながらスマホで電話をしているのは従姉妹の水上美奈子だ。みなかみみなこ

美奈子は朱里の5つ年上で近くの大学に実家から通っている。朱里とは幼少期からよく遊んだ仲で、最近は1人暮らしを始めた朱里を心配して度々電話をしたり訪ねてきたりしていた。

『で、何があったの？』

「いやー、その、たいしたことじゃないんだけどね。……………えと、仲の良い友達、できたかも。えへへ」

『お、やったじゃん！ 新しい学校にもようやく馴染めてきたって感じ？ お姉ちゃん、朱里ちゃんが苦勞しているんじゃないかって心配だったけど、いやー、良かったわ』

『えっと、そんなに心配かけてた……？』

『かけてたよー。父さんたちにもねー。でも朱里ちゃんが頑張ろうとしているなら見守ろうって』

『あう……』

朱里は家族や伯父夫婦、それに美奈子相手にはこれまで強がって見せていた。友達が1人もできていないことなどを隠し、なんとかがんばってる風を装っていた。

が、そんな強がりは見抜かれるものなのだ。特に朱里は感情が声や言動に現れやすく嘘をつくのが下手だった。

『で、どんな友達ができたの？ お姉ちゃんの予想だと大人しくて眼鏡をかけた文学少女って感じのスリムな可愛い女の子なんだけど当たってる？』

『……なんでそんなに具体的なの？ っていうか、ブー。ハズレです』

『えー。どこがダメだったの？ スリムじゃなくてぽっちゃりしてるとか？』

『女の子ってところから違う……ううん、よく考えたら一つも当てはまってないかも』

『ん？ ……男の子、なの？』

『……うん』

『………彼氏？』

『ち、違うよっ!? そういうんじゃないよ!?』

『………そっかあ。男の子、かあ……』

電話の先で美奈子は何かを言いかけて言い淀んでいた。可愛い従姉妹が人付き合いを苦手にしていないかと心配になるのだ。

とはいえそこで迂闊に相手との関係を壊しかねないことも言えなかった。

美奈子は朱里にも少しぐらいは友達ができているだろうと実情よりも甘めな予測を立てていたが、それでも朱里の声はいつもたいてい沈みがちだった。それがようやく弾む声が聞けたのはその男の友達ができたからだ。生活に張りがでてきたのはその声が物語っていて、そのことを誰よりも朱里が喜んでいいる。

だというのに、心配だからといって男に気を許すなどと警告した結果仲を引き裂くようなことにでもなれば、朱里は再び陰鬱とした生活に戻ってしまうかもしれない。青春真っ盛りの高校生がだ。

『お姉ちゃんは、朱里ちゃんには女の子の友達もたくさんできて欲しいなあ』

『それは……が、頑張ります』

『うん。がんばれ』

ここで「もうたくさんいるよ」とでも返してくれればなあと美奈子は思った。

吉永朱里は現在コミュ症を発症してろくに友達もつくれずにいるが、これは彼女のこれまでの生い立ちに原因がある。

小学校、中学校と続けて朱里はイジメを受けたのだ。小学校では男子から。中学校では女子から。

男子から受けたそれは、いわゆるこの年頃の男の子に良くある、気になる女の子にちょっかいをかけてしまうというやつであった。そしてこれが行き過ぎて女の子を泣かせてしまい、余計に関係が悪くなるというのも珍しい事例ではないだろう。朱里の場合もそんな感じであった。

非常に迷惑かつ誰も得しない流れであるが、思春期に入りだした年頃の心理状況というのは複雑で暴走しがちになるのは仕方ない面もある。それに朱里もこの時は周りの女子の友人たちが庇ってくれたりもして、そこまで大きな問題とはならなかった。

しかし中学にあがると今度は女子生徒からのイジメが始まった。

最初は上級生からだだったが、それが拡がり同級生の、それも友達だった女生徒たちからもイジメられるようになった。

朱里が的にされた理由は小学校の男子から受けたイジメと根底は一緒である。朱里が美少女だったからだ。

小学生の頃は男子からのちょっかいを庇ってくれた友人たちも、中学校にあがった頃になるとますます可愛らしくなった朱里に対して妬み嫉みが強まってしまったのである。

それでも誰かがイジメを始めなければ関係は破綻せずに付き合ってたかもしれないが、不幸なことに朱里は上級生から目をつけられてしまいイジメが始まってしまった。

そしてこの手のものは段々とエスカレートしていく。

もともと精神的に強いとは言えない朱里は、けっきょく中学1年の2学期から不登校になった。

朱里の両親は彼女を気遣い不登校を責めるようなこともなく、学校にも抗議を入れてむしろ行かせないようにしたぐらいだった。そして学校に行かずとも最低限の学力だけはつけさせようと勉強の面倒を見たりと世話を焼いてくれた。朱里も両親が忙しい中であれこれ手をつくしてくれることに感謝し、このままで良い訳がないとの想いを抱いて両親と相談しながら復帰を目指した。

両親の仕事の都合で中学校を転校するということは難しかったこともあり、けっきょく中学は不登校のまま卒業を迎える流れになった。その上でどうするか考え、高校は今までの知り合いのいない地域の学校に入学することになった。

家から通える学校では当然この条件にはあてはまらない。両親は仕事があるため引越すことも簡単ではない。そんな訳で朱里の1人暮らしが検討された。

もちろん不安もある。父親は無謀だと強く反対した。だが当の朱里が1人暮らしというものにちよっとした憧れがあり乗り気だったために最終的に両親が押し切られた。

とはいえ心配するなというのも無理な話。両親の不安を和らげるためにもいざという時に頼れる相手は必要だった。

そこで白羽の矢が立ったのが吉永家の父親の姉夫婦——水上一家である。

伯母たちが住んでいる住居は空き部屋がなかったので同居ということにはならなかったが、何かと気にかけてくれる親戚が近くにいるという点でようやく朱里の1人暮らしにOKが出て、そして今の高校へと入学した。

春から通うことになった高校はとりたてて特徴のない学校である。

偏差値の高い進学校でもなければ部活動に力を入れていて有名な選手がいるということもない。地元の中学からあまり将来のことを深く考えていないような生徒がぞろぞろやってくるようなそんな高校だ。

これは朱里の学力がけっして高くないからでもあったが、そんな学校であれば朱里を知っている者が県をまたいで入学してくる可能性も皆無であるから都合も良かった。

ただそんなすでにコミュニティが形成されている場所に入ってきて交友関係を一から作り直すのは朱里にはハードルが高すぎた。

家族や親戚相手ならば普通に話すことができたために本人も甘く考えていたが、いざ同年代、それも同性を前にするとまともに話をするこすらできなくなっていたのだ。

しかしせっかく高校入学を機に心機一転再スタートを切ったというのに、初っ端から行き詰まりましたとは親にもなかなか言えたものではない。

なんとかかしないと意思いつつも何ともできないもどかしい日々が続いた。そんな中で孝弘との交流が始まったのである。

朱里はこの縁を大切にしたいと思った。

腹が膨らむと眠気が来る



孝弘から見た朱里は、今まで抱いていたひたすら大人しいという印象を覆すほどに積極的な面のある女の子だった。

もちろん朱里が人と話すのが苦手であり、度々会話する仲間になっても常に孝弘から話しかけてくるのを待つという消極的な面を強く見せてもいるのだが、それでも時に異常なまでにぐいぐいと押しの強さも見せてくるのだ。

「……………」

「さ、里村君っ、どど、どうぞ……………」

「お、お邪魔します」

朱里も緊張しているようだが孝弘も緊張していた。

今日は土曜日。そして時刻は昼の12時。昼食時である。孝弘は朱里に昼食を御馳走になり、彼女のアパートへとやってきていた。

——1人暮らしの女の子の家にお呼ばれとか……………いいのか？　こんなラッキーなことがあってもいいのか!?

そんなイベントが起きたのは昨日孝弘が休日は昼食をとらないことが多いと言ったのがきっかけだった。

孝弘は休日は一日ずっと家でゲームに没頭していることが多く、朝食と夕食は食べるがそれ以外は腹が減ったらオヤツをつまむぐらいで昼食を用意せず怠けることが多かった。手間が惜しいというのもあるが本題はゲームに集中したい、である。

ところがそれを聞いた朱里が孝弘が面倒を嫌っただけだと思い、「だったら家に食べに来る？」と誘ってきたのだ。

最近かなり気になりだしてきた美少女が、恥ずかし気にもりながらそんな誘いをかけてきた。ここで「ゲームしたいからいいや」と断れる訳がなかった。

まあそもそも孝弘が朱里の料理を何度か褒めて煽ってとしてきたからでもあるのだ。暗にまた食べたいみたいなことを匂わせるようなことまで口にはしている。

——っても、吉永さん、不用心すぎだよなあ……。

信頼してくれているからと思えば悪い気はしないが、孝弘と朱里はまだ付き合いも短くそれほどお互いのことを知っているとは言えない仲でしかない。だというのに自分しかいない家にあげてしまうというのは少々どころかなり不用心である。

エロ本やエロゲーを年相応の好奇心に突き動かされてそこそ嗜んでいる孝弘からしたら、襲われるのを期待しているのではないかとすら思えて仕方がない。

もちろんそれで襲ってOKならハッピーであるが、そんな人だと思わなかったENDになると人生詰む可能性すらある。目先の衝動に突き動かされてはいけないと自分を戒めなければならなかった。

——とりあえず、良い人だとは思われてたいし、あまりにあんまりなところは前みたいに指摘してあげた方がいいんだろうな。

女性の1人暮らしであることを孝弘に簡単に教えたことから朱里が不用心であるのは間違いないのだ。いつかそこにつけ込まれて泣きを見ないように注意するぐらいはしてあげた方がいい。そしてポイントゲットだ。そう思った。

「あの、あ、あんまり手のこんだ物は、作ってないけど……」

「……いや十分すぎるよ吉永さん……」

リビングに通されるとテーブルの上に料理が並べられていった。

ご飯に味噌汁、アジの塩焼き、肉じゃがに豆の煮付けに冷奴。見事なまでの和食揃えがデデンと姿を現す。盛り付けも孝弘の方がずいぶん多めに盛られているし、1人分も2人分も手間はたいては変わらないから負担にならないという謳い文句もこれを見ると「そんなことないだろ」と言ってしまうようになる。

しかもご飯、米なのだ。

最近の孝弘もそうだが朱里は以前パンが主食だと言っていた筈だった。なのにホカホカに炊かれた米が出てきた。レトルトの可能性も考えたが、視界の端に真新しそうな電子ジャーが見えたのでこれで炊いたのだろう。

「えと、里村君、こういうのが良いのかなと思って、わ、和食にしてみました……!」

どやあとという感じで自慢げに披露して……というつもりなのだろうが、孝弘の顔を窺って反応を気にしている表情は不安げだ。

「ありがとうございます吉永さん。高校入ってから適当にすませる癖がついてたからすごく嬉しいや」

「……えへへ。お、お口に合えばいいけど」

「では、さっそく、いただきますっ」

朱里の料理の腕は普通である。絶品料理などつくれないしそこまで拘る方でもない。

不登校だった中学生時代、高校での1人暮らしが現実味を帯びだした頃から母親に習って今に至るので、それより前から朝夕の食事を作り続けてきた孝弘の方が料理歴は長く腕も上だったりする。

ただそれでも誰かが自分のために作ってくれた料理ならばうまさ割り増し、可愛い女の子だった場合はさらに倍が世の真理。

「うん、美味しい。吉永さんって料理上手だな」

「そ、そうかな？ でも良かった」

朱里はホツとした表情。

なにかドジを踏みはしなかったか、孝弘が嫌いな物を入れたりしていなかったか不安だったのだ。

それからしばらく終始和やかな雰囲気です。2人は食事を終えた。

「……げふ。ご、御馳走様」

味付けは悪くなかったが量は多く、こういう時のお約束として残すことは許されない強迫観念から全て食べきった時には腹が膨れてばんぱんだった。

「お粗末様でした」

朱里は孝弘より先に食べ終わっていた。孝弘が食べ終わると立ち上がって食器を下げっていく。

「あ、食器ぐらいいは俺に洗わせて」

「い、いいいいいよ、里村君はお、お客様なんだからっ、気にしないで座ってっ。あ、デザート、出そうか……？」

「……あー、今はいいかな。けっこうお腹いっぱいだから」

「そ、そう？ じゃあまた後でね」

御馳走になっている立場なんだから食器洗いを断られても食い下がるべきだったかなと孝弘は思ったが、ここは勝手のわからない他人の家だ。家主がいいというのだから甘えておこう。それに台所に向かい食器を洗う私服の朱里の後ろ姿を眺めていると幸せな気持ちになれて、お腹の満腹感と合わせて意識がぼんやりとして動きたくなくなってきた。



——どうしてこうなった……？

孝弘は首をひねることすら満足にできないほど身動きとれなくなっていた。そんな自分に胸中で思いつき疑問符を浮かべ続ける。ドギマギしながら。

「っ……っ……っ」

朱里もかなり緊張しているようだ。それに恥ずかしいのだろう。見上げると顔が赤くなっている。

——いやあ、これはその………やりすぎだぞ吉永さん……！

今どのような状態かというと、なんと朱里の私室で絨毯の上に座っている朱里に孝弘は膝枕してもらっているのだ。ドギマギしない訳がない。少し前までであった眠気なんて吹っ飛んでしまった。

朱里が食器を洗い終わると孝弘がうつらうつらしているのに気が付いた。昨日はゲームで夜更かし、さらに今日朱里の家にお呼ばれしていたことで軽い興奮状態になり、あまり寝れてなかった孝弘は昼食後に眠気に襲われ出した。

そこに朱里が気を利かせてきたのだが、最初はあろうことが、

「え、えと、わ、わわ、私の部屋のべ、ベッドで寝る……？」
などと言ってきた。

その時点で孝弘はだいぶ眠気はなくなってしまった。

強い興味はあれども女の子のベッドで寝るなんていうのは簡単にして良いこととは思えなかった。

だから断ったのに、朱里が食い下がってきた。

「で、でも、眠たそうだし、ど、どうせなら横になった方が良くよっ」

と来て、そこから二転三転会話が転がり、気が付けばこうして膝枕してもらうことになったのだ。

朱里の私室は廊下などとは違い立派な女の子の部屋だった。

ベッドに机にテレビにパソコン、タンスにクローゼットに本棚が二つといった家具が壁際を埋め、中央が空いた配置になっている。そして所々に可愛らしいシールが張り付けてあったりぬぐるみが置いてあったりと朱里の趣味をうかがわせる内装となっていた。

そんなところに入って良いのかと孝弘は思ったが、朱里に招かれ、躊躇すると朱里が「ご、ゴメンなさいっ、こんな部屋入りたくなかったよね……」なんて反応するものだから入らない訳にもいかなかった。

そしてその後は朱里に促されるままに横になって今の姿勢だ。朱里はベッドに背を預け、両脚を伸ばした比較的楽な格好で座っている。スカートを間に挟んでそのほっそりとした腿の上に横向きに寝転がった孝弘は、目をぎゅっと閉じて下手に動くに動けない状態に陥っていた。

——これ一般には膝枕って言うけど正確には腿枕なんじゃないかな……!?

などと変に朱里を意識しないようにそんなことを考えたりもしていた。

「え、遠慮せずに寝ちゃっていいから、ね？」

頭をなでてくる朱里の手からも、頭を乗せている太腿からも硬さが伝わってくる。だいぶ無理をしているようだった。

もっとも緊張はしていても嫌々しているという感じでなかったことで孝弘もこの状態でい続けることができた。

ただこれでぐっすり寝るなんていうのは無理だった。

——いやでも、本当にこれいいのかなあ……？ 俺たちまだ付き合ってもいないのに……。

朱里の振る舞いは過剰な接待のように感じた。

異様に世話を焼きたがる。その上で孝弘が拒否するような態度をとると途端に顔を曇らせる。

好きだけ甘えさせてくれるというのは自堕落な人間にとってはとても楽な状況だろうが、漫画などで美人局やぼったくり系の展開を何度も見てきた孝弘はひよっとして後からお金を請求されるような流れになるんじゃないか、なんてことも思い別の意味でもドキドキしていた。

「…………… 1回500円ぐらいなら払ってもいい」

「んん……………？ な、何か言った？」

「……………ぐー」

「……………寝ちゃったの、かな？ ふうん……………えへへ」

世話を焼かれているのは孝弘の方なのだが、世話を焼いている朱里もまんざらではなさそうなこともあり好意に甘えてしまう。

実際に朱里はこうして人に何かをしてあげている時が一番落ち着くことができた。イジメを受けたトラウマから目の前の相手が不機嫌になることが怖く、人の顔色がとにかく気になるように

なったのだ。

だから喜んでもらえることをすることが朱里の心の平穩へとつながるのである。そして現在過剰な奉仕精神を発揮しているのは、せっかくできた友達（候補）を手放したくないという強い想いがそこに重なっているからであった。

朱里は別に孝弘と深い関係になりたいと考えてこのようなことをしている訳ではない。顔を合わせれば会話するような関係で満足できていた。しかし自分から話しかけることができないう朱里は、話題が尽きたり自分の話をつまらないと思ってしまう。そのうち孝弘が話しかけてきてくれないようになったりするのでないか、という危惧を持っていた。そうならないために自分に付加価値をつけようとしているのがこうした接待につながる。

スカートの布地越しとはいえ女子高生の太腿の上に頭を乗せているという特殊なシチュエーション。この状況で普通の健全な男子高校生が平静でいられる筈がない。下手に動いてどこかに触ってしまったら大変だと身じろぎもできず、さりとて離れがたい魅力もあって、孝弘は悶々としながら10分ほどそのままで過ごした。

「……あれ？ さ、里村君……？」

いい加減体が辛くなって仕方なくむくりと上体を起こすと朱里が怪訝な声を上げた。

「も、もういいの……？」

ひと眠りというには短い時間だ。しかし孝弘の眠気はすでにどこかに飛んでしまっている。

「あ、うん。えっと……いやー、なんだかすっっかり眠くなくなっちゃった」

「そ、そっか。あの、わ、私の膝枕じゃ寝にくかった……かな？」

「えー、あー、ま、まあ……そう、かな？」

孝弘としては否定的な意味で言ったつもりではなかった。寝心地が良いのは普通の枕の方であるのは確かだが朱里の膝枕なら金を払ってでもしてもらいたいと思ったぐらいだ。むしろ無償でしてもらったのを悪いとすら感じている。

だからこの一言は恥ずかしいのを隠そうとしているのと、危ない衝動にかられかねない自分を戒めるためにあえてもうやらなくて良いよという意味での言葉であった。

が、朱里はそう受け取らなかった。

「うえっ、ご、ゴメンなさいっ、満足に膝枕もできないでゴメンなさいっ。な、何が悪かったのかな？ ……て、あ、ああ……！」

「ちよっ……!？」

朱里は孝弘の頬に手を伸ばした。指先でそろりと触れる。ほっそりとした指が頬に触れ孝弘はドギマギしながらされるがままだった。

「あ、跡ついちゃってる……」

孝弘の頬には横向きに寝転がってスカートに接触していた部分にスカートの皺の跡がついていた。とはいえこんなものは気にするようなものではない。普通の枕や布団の上でも寝相しだいで跡がつくことはある。

「さ、里村君っ」

「は、はいっ」

「……こ、こ、今度はスカート、ぬ、脱ぐから……」

「え、ええ……!？」

「……だから、ま、また……次の機会に、も、もう一度、膝枕させてくれませんか……？」

「次の機会に……」

「……ダメ……？」

「……ダメじゃないです。ぜひお願いします」

あつて良いのかそんな機会が!? 孝弘はそう問い質したかったが、口から出たのは了承の言葉だけだった。

「よ、良かったあ」

「……」
「こんなアプローチをされれば、この娘ゼったい俺に気があるよなあ、と孝弘が思ってしまうのも仕方ないだろう。」

「吉永さん、今日は御馳走様。昼飯すごく美味しかった。それに色々話せて楽しかったよ」
時間は午後の4時前ぐらい。孝弘はそろそろ帰ると朱里に告げた。

そのままずると長居すると夕食も食べていってと言われそんな気がしたが、そこまで甘えではさらに帰るのが遅くなる。はつきりいって夜遅くまで滞在するなんてことになってしまうと色々まずい気がしてならなかった。

「えへへ……お料理、好きだから。里村君、良かったら、あの、ま、また、食べに来てね……？」
「あ、うん、是非」

「えっと、ま、毎日来てくれても良いからねっ」
「いや、え——」

「あ、朝でも夜でも、い、いつでも来てねっ。め、迷惑なんてことないからっ。つ、作って欲しい物とかあったら、言ってくれたら、わ、私、がんばるから……！」
「……」

これが冗談めかして言っているのであれば孝弘も気楽に言葉を返せたのだが、そうではなくて朱里が必死なのは孝弘にもわかった。社交辞令にすら思えないのだ。

今日の昼食だけでも大概なのに膝枕の件といいこの誘いといい、なんでこんなにも朱里がするのかまではわからない。

孝弘に気があるからという理由が一番しっくりくるようで、しかし本当にそうなのかと頭の冷静な部分が告げてくる。ひよっとしたら少し親しくなった相手なら誰にでもこんな感じなのかもしれない。

——危ういよなあ、吉永さん。

度々感じてきた朱里の危うさ。それを帰り際に最も強く感じた孝弘だった。

2度目の食事と膝枕



いつでも料理を食べに来てと言われたからといって、それが社交辞令の類であることも考えないほど孝弘は常識知らずではない。いや、恐らく朱里の言動からすると本人的には加減がわかっていないという感じになるのだろう。これを言葉通りに受け取ってあつかましくも入りびたるよくなことになったら朱里を困らせるに違いない。孝弘は自制心を発揮し甘い誘惑に乗りたい気持ちを抑え、そう判断することにした。

「さ、里村君っ、きよ、今日はあの、ご飯どうするのかな……？ う、うちに来る……？」

しかし放課後校外で顔を合わせる度にこう尋ねられ、今日は遠慮すると断ると辛そうな表情をされてはむしろ応じるのが正解なのではとしか思えなくなっていた。

「……今週は家ですることあるから、また土曜日の昼に食べに行っていていいか？」

「う、うん……！ 御馳走用意して待ってるねっ」

結局そんな約束を交わした。

そして迎えた土曜日。

「あの……里村君は、どこの出身なの？」

昼食をとりながらの会話である。

この日の昼食もまたずいぶんな量があるが、それだけ手間をかけてくれる以上は残すことなどできる筈もない。孝弘はひたすら目の前の料理をたいらげながら質問に答えた。

「俺はここが地元。実家もわりと近所にあるぞ」

「え、そうなの？ えっと……な、なんで1人暮らししてるのか、き、聞いてもいい……？ い、言いたくなかったら、別にいいよっ」

おっかなびっくり朱里は尋ねた。実家が近くにあるのに1人暮らしをしているのは複雑な家庭の事情があるのかもしれないと思ったのだ。もっとも孝弘からしてみれば別に話し辛いというような理由でもなかった。

「俺さ、ガキの頃に母さんが亡くなって、それから父さんと2人で暮らしてたんだ」

「え、あ、え、ご、ゴメンなさいっ」

「いやそれはいいんだ。もうだいぶ前のことだからぜんぜん気にしてない。で、実はこの春に父さんが再婚してさ」

「あ、えっと、それは、おめでとうございます、でいい……？」

「そだな。まだたいして会ったことないけど良い人だと思うし、父さんもけっこう舞い上がってるし。で、よくできた息子は気を利かせて2人に新婚気分を満喫してもらおうと家を出た訳」

「あー……」

事情を説明されて朱里も納得した。

しかし本当のところの事情は少々違ったりする。孝弘は気を利かせたと言ったが、実際には父親から高校3年間は家を出るように言われたのだ。

それは孝弘と父親の仲が悪くてそうなった訳ではない。再婚相手の女性は今年で30歳。孝弘の父親が40過ぎなので一回り年が離れたお相手でも女盛りである。孝弘とはさらに歳が離れているが、それでも性欲旺盛になってきた高校生の男子と一つ屋根の下で暮らさせては間違いのものになりかねないという危惧を父親が抱いたのだった。

孝弘からすると30歳というのはおばさんという感じで、同年代に比べると異性としては魅力が薄い相手でしかなかったが、1人暮らしにも興味があった孝弘は良い機会だと快諾した。すでに家事全般はこなせるので生活に困らないだけの生活費を貰えるというのであれば不安もなかった。

「吉永さんはここが地元じゃないよな？　なんでまたこんなところの高校に入ろうと思ったんだ？」

自分のことを聞かれたから次は朱里に聞くのは自然な流れだろう。

この理由は前々から孝弘が気になってきた点だったので渡りに船だ。

朱里の両親は何を考えて激しいコミュ症の朱里を1人で生活させようと思ったのかはなはだ疑問だった。娘を大事に思っていないんじゃないかとすら疑っている。

「あう、えっと、あのね……わ、私、中学でちょっと色々あつて……誰も私のこと知ってる人がいないところで、が、がんばりたいなあって思ってる……」

「……そっか」

孝弘は朱里がイジメにあっていた事まではわからなかったが、それでも対人関係で何かトラブルがあったのだろうぐらいは察した。

「でもよく吉永さんの両親は1人で暮らすの許可したな。この際だからはっきり言うけど、見てものすごい危なっかしいんだけど。どうせなら両親も一緒に引っ越してくるとかできなかったのか？」

「あうう……。そ、そんなに危なっかしい、かな……？　そ、それでね、お父さんもお母さんもお仕事大変らしくって、あんまり遠くに引っ越すのは難しいんだって。でもここには親戚がいるから、いざとなったら頼れるし」

「ふうん」

子供のために仕事を変え住居を変える親も確かにいる。だがそこまでするのは簡単なことではない。やらなかったからといって子のことを大切にしていけないなどとも決して言えない。

孝弘も長らく片親だけだったこともあり、何かあったとしても親には迷惑をかけたくないと思っっている。よっぽどのことがない限りは親に引っ越して転職しろなど言えないだろう。だから理解はできた。

それに朱里の場合は孝弘よりも新しめの良いアパートに入居している。正確には聞いていないが毎月の生活費の振込額も必要額よりかなり多いようで、なるべく不自由ないようにという親からの配慮が見て取れた。

ただそれでも朱里を1人暮らしさせるのは早計だったのではないか。その点に関しては孝弘は朱里の両親の判断ミスだとも思った。



「ど、どうぞ、入って」

昼食後、お茶を飲みながら孝弘がぱんぱんになったお腹をさすっていると、朱里から膝枕させてと言い出してきた。前回のリベンジがしたいと。

孝弘は今日は眠たくないからと一旦断ったのだが、そうすると今度はじゃあ耳かきをさせて欲しいと懸命に言われ、ここで孝弘はうんと頷いた。

一度断ったのはもちろん膝枕が嫌だった訳ではない。前回してもらった時に次はスカート脱ぐなどと朱里がとんでもない発言をしたのが原因だ。もし本当に朱里がスカートを脱いだなら、その時にどんな反応をすれば良いのかわからなかったのでつい断ってしまったのである。

「じゅ、準備する、ね……」

そして朱里の私室に招かれた後、孝弘が見ている前で宣言通り朱里はスカートを脱ぎだした。それは羞恥心をどこかに置いてきたような思い切りの良い脱ぎ方ではなく、孝弘の視線を気にしながらもそれでも自分で言った手前止めるとも言いだせず、おずおずとスカートのホックを外して脱いでいった。

孝弘は最初は顔を背けたものの、己の中の煩惱に最後まで抗うことができず、なんだかんだでちらちらと覗き見ていた。そもそも朱里からは部屋から出ていけとも後ろを向けとも言われていない。

だからスカートを脱いだ後に現れた、飾り気のない純白のパンティーの姿もばっちり視界に収めていた。

「や、やっぱり、け、けっこう、恥ずかしい……」
「……………」

——危なっかしいって言った直後にこんなことするんだもんなあ……。

ここはいくらなんでもそんなことしちやいけないと良識を発揮する場面だろう。孝弘もそう言うってあげるべきだと思った。が、言えなかった。朱里の太腿に直に頭を乗せる誘惑には勝てなかった。

「ど、どうぞ……………」

前回同様にベッドにもたれかかり、脚を伸ばして朱里は床に座った。そして太腿をぽんぽんと叩いて孝弘にここに頭を乗せてと促す。

「お、おう……………」

お互い恥ずかしくて俯きがちで顔が見れないが、その分孝弘の視線はどうしても朱里の下半身に吸い寄せられた。上着ブラウスの裾がかかっているため多少見えにくくなっているが、パン

ティーが完全に隠れてはいない。朱里には隠そうという意識が希薄なのかもしれない。

そしてそこから見える素足がまた生唾を飲み込むほどにほっそりとして可愛らしかった。

朱里はあまり肉厚がある方ではなく細身だ。ついでに言えば服越しに想像できる胸も大きい方ではない。それでも全体的に貧相という感じではなく、あくまでほっそりとした美しいラインを形作っていた。

「じゃあ……遠慮なく」

体勢自体はこれまた以前と同じで朱里から顔を背ける向きで横になった。しかし前回とは明らかに頬に感じる感触が違う。直に触れた朱里の太腿からはほのかな温かさが伝わり、肉の弾力もいくぶん増しているかのように感じた。

「ま、ま、前に比べて、どう、かな？ 寝転んでも、大丈夫そう……？」

「……ああ」

「……えっと、な、何か気にいらなかったら、言ってね……？」

「……いや、うん、なんか、わ、悪くないと思う」

「そ、そう？ じゃあ、耳かき、するね」

「……ああ、よろしく」

朱里の指先が恐る恐る孝弘の頬や耳に触れてくる。こういうシチュエーションは恋人同士の逢瀬のようだ。憧れを抱く者もいるだろう。孝弘もこんな風にしてもらいたいと思ったことはある。

朱里もいつか恋人相手にしてみたいと思っていた。

ただ他人の耳かきをするなどそうそうあることではない。朱里もこれが初めてで、敏感な耳の中を掃除するという行為を失敗しないかハラハラしながら慎重に耳掃除を続けた。

——吉永さん、慣れてはなさそうだけど、覗きにくいとかそういうことはなさそうだな。

耳かきされながら孝弘が思ったのはそんなことだった。漫画やゲームから得た知識から、巨乳の女性は胸が邪魔で耳かきしにくいという風に考えていたためである。その点朱里の胸はそこまで大きくないので支障が出ないということだ。もし本人が聞けば色々思うこともあるだろう。

「……うん、こっちは……これで、終わり。里村君、じゃあ反対向いてくれるかな？」

「……わ、わかった」

耳かきに集中していた朱里はまったくわかっておらず、うまく掃除できたことで調子にのって何気なくそう指示したが、孝弘が反対側を向くということは朱里の体の側へと顔を向けるということだ。

つまり、頭を浮かしくるりと反転してもう片方の耳を覗けるようにすれば、その目の前には朱里の下腹部がある。白いパンティーが柔肌に食い込んでるところや皺がよっているとところなどものはつきり見える。その絶景に見惚れ、思わず鼻を動かすまいまでもをかいでしまう孝弘だった。

「……う、うえ……」

姿勢を変えてから孝弘の視線が少々不自然な方向で固定されていることに朱里も気が付いた。口からは恥ずかしいのを紛らわせるためか変な声もれた。しかし膝枕に誘い男の前でスカートで脱いだのは自分なのだ。その自覚はあって、孝弘の視線が気になりつつも咎めるようなことはできず、とにかく耳かきに集中しようとした。

「……っ、っ」

「あっ、ご、ゴメンなさいっ」

しかし羞恥心が刺激されてしまったせいで最初に片耳を掃除した時ほどには集中しきれなかったようだ。耳かき棒を突っ込みすぎてしまい孝弘が一瞬苦痛の反応を示した。それを察して慌てて謝罪するも、明らかかなミスにさらに動揺してしまった。

「いっ」

「ご、ごごごっつ、ゴメンなさいい……」

耳垢を落とし、それを拾おうとさらに奥に耳かき棒を突っ込んでしまい孝弘を痛がらせてしまった。本来であれば一言謝ればすむような些細なミスだ。孝弘もこんなことで怒りはしない。しかし朱里は立て続けのミスにますます挙動がおかしくなり手元が怪しくなりだした。

「え、いっ、あの、吉永さん……？」

朱里の太腿に頭を乗せ、そのまま少女の薄い布地に覆われた股間を凝視できる時間は孝弘にとつて至福の時だった。できるならば終わらせたくない時間。ちょっとしたことであれば気にすることなどありえない。

だというのに孝弘は声をあげずにはいられなかった。耳の中を異物で触れられるという繊細さを求められる行為で、こうも危険を感じる挙動を感じてしまったのはたまらない。

「ひぐっ、ご、ゴメ……そんなつもりじゃ……わ、わざとじゃないのっ」

「ああ、うん……とっ」

朱里が耳かき棒を持ち上げたタイミングを狙って孝弘は起き上がった。もしこのまま朱里が失敗を取り戻そうとして続けようとしたら怖いと思ったのだ。

「ゴメンなさいゴメンなさい、い、痛かったよね……」

「まあ、ちょっとは……」

この時孝弘は言葉に困った。大事にするほど痛かった訳ではない。本当はぜんぜんたいしたことはないと笑ってすませても良いぐらいだ。しかしじゃあまたもう一度したいと言われたら簡単にOKできるかというそれは躊躇する。ただそれでも最終的に受け入れてしまうだろう。朱里はそういうところは押しが強く、孝弘は強く拒めなかった。

その自覚があるがゆえに少しは朱里を牽制しようという葛藤がこんなあいまいな一言になったのだ。

つけ込まれやすい娘にはつけこむべし



「うう、ゴメンなさい……。私、なんでこんなドジなんだろう……。あの、ど、どうしたらいいかな？ どうやって謝ったら……。あつ、そうだ、迷惑料とか慰謝料とかなら……。！ す、すぐお金用意するから！」

「ス、ストップうっ！ 待った吉永さん！」

立ち上がろうとする朱里の肩を抑えて静止した。

なぜ朱里がここまで暴走するのか孝弘からすれば不思議で仕方なかったが、これは少々強引にでも止めねばなるまい。

昼食を御馳走になりその上膝枕までしてもらおうという贅沢な接待を受けていたのは孝弘だ。孝弘がお礼をするのならともかく、朱里から迷惑料として金銭まで受け取るなんてして良い筈がない。

「別にそこまでしてもらおうようなことじゃないからっ。そんなに痛くもなかったし、怒ってもないからっ」

「で、でもお……私、里村君にひどいこと……」

「ぜんぜん気にするようなことじゃないって」

「でも……でも……さ、里村君、優しいけど……私……こんなんじゃ……」

再三気にするなと孝弘が言っても朱里はなかなか納得しなかった。心の整理がつかなかったのだ。

朱里からすれば孝弘の怒りを買うのも怖い、自分に関心が無くなってしまふのはもっと怖かった。ドジが続けば最初は笑って許してくれていた孝弘も、やがて呆れてそして最後は何も期待してくれなくなるかもしれない。

一方で孝弘も困っていた。どう言えば良いのかわかりかねていた。早くこんな失敗忘れて、もっと気楽な状態に戻ってくれば良いのに。

そんな心理状態だったからだろう。孝弘は自分でも意外な提案をした。

「じゃ、じゃあ、そんなに悪いと思っっているんなら、償い代わりに痛くした俺の耳を舐めてくればよ」

「え……？」

「ほら、舌で舐めてくれたら痛みも和らぐしさ」

そこまで言って孝弘は我に返った。何を言っているんだと思った。軽蔑されても仕方ないようなことを要求してしまった。

「あ、い、今のは——」

「う、うん、わかった。それで里村君が許してくれるなら、舐めるよっ」

孝弘が冗談だと言おうとするより早く朱里がまくし立ててきて、それで孝弘も口をつぐんだ。だが胸中では「え、本当にいいの？」と呟いていた。

その行為を恥ずかしいと思うよりも、よほど孝弘へ償わないとという意識が強いのか、朱里の妙な行動力が発揮されて孝弘の顔の横に朱里の顔がぐぐっと迫る。

ふうふう、という吐息が耳に届き、孝弘の顔と頭に朱里の手が触れた。それだけでもドキッとさせられたが、続けて耳に湿った音と柔らかいものが触れる感触がやってきた。

ぴちゃ、ちゅび……じゅぐぐ……。

——吉永さんがっ、俺の耳を舐めてる！

ゾクゾクとした快感がせりあがってきたのを感じた。

朱里がしているのは主に耳の穴に舌を差し込むようにして唾液をつけるような感じだった。目的が耳かき棒で痛めた部分を癒すことなので、耳たぶをはむっと啜えたりとか耳全体を丹念に舐めまわすというようなことはなかったが、これだけでも孝弘にとっては十分すぎるほど刺激的だった。

「ゴメンね……痛くしてゴメンね……」

耳舐めに加えて囁き声で謝罪されるのもゾクゾクきた。

謝られるようなことじゃないとはわかっているが、朱里がこれで満足するのなら受け入れるのがお互いにとって最も良いに違いない、という免罪符を掲げることには抵抗がなくなってきた瞬間だった。

「も、もういいぞ、吉永さん。その、十分癒してもらったから」

時間にしてたっぷり10分近く朱里の耳舐めは続けられた。

しばらくすれば自分から止めるだろうという孝弘の予想は外れ、いつまでたっても朱里は止めようとしなかった。孝弘の顔に手を添えて固定し、熱心にいつまでも耳を舐め続けるのだ。孝弘もそれを止めるのが惜しい気がしてあと少しあと少しと間延びさせ、ようやく先ほど静止をかけることができた。

「……もう、いいの……？ 許してくれる……？」

朱里のそんな一言もなんだか名残惜しそうに思えたのは孝弘の気のせいだろうか。

「い、いいっ。完全に許したっ」

孝弘の耳は片方だけ唾液にぬめってべちょべちょになっていた。気にはなったが拭おうとは思わなかった。いや、朱里が見ていなければ手でぬぐってそれを舐めていたかもしれない。

「……よ、良かったあ。ありがとう、里村君」

「あ、ああ」

孝弘ももう謝る必要がないとか感謝する必要がないとか言うのは止めた。

「あ、あのね、里村君。あの……ま、また、今度、ひ、膝枕、させてくれる……？」

「え……？」

「み、耳かきさせろって言うんじゃないんだよつ。ただ、眠たくなったり、そうじゃなくても、ちよ、ちよっと横になりたいなって時にね、あと、枕が欲しいなって時にね、わ、私にまたさせて欲しいっ」

「……」

朱里は孝弘に自分の存在価値を示したいのだが、他に何をすれば良いのかわからないからこそ要望である。しかしこれも孝弘には良くわからない拘りだった。

しかし拒否する理由もないから頷くのは簡単だ。
が、少々魔が差してしまった。

「うーん、そうだなあ。でもなあ……」

「お、お願いっ。な、何か不満があるんなら言っつ。ど、どんな風にしたらいいとかっ」

「……じゃあさ、次は上着も脱いでくれるか？」

「えっ。う、上着も脱ぐ、の……？」

「なんか下だけ脱いでるのもバランス悪いかなって思ったんだけど。ああ、思っただけ思っただけ」

チラリと孝弘は朱里の表情を覗き見た。ここで朱里が怒りだすようならすぐに冗談だったと謝罪するつもりだった。

「……わ、わかった。次は、そうするねっ」
マジかよ、本気で大丈夫かこの子……。と孝弘は朱里を心配した。しかし同時に、朱里がどこまで自分の要求を飲んでくれるのかという興味と興奮が増してもいた。
性欲旺盛な高校生男子がこのような状況で魅力的な異性に性的な目を向けられない訳がないのだ。そしてそれは若い男子を暴走させていくには十分なものであった。



翌日。日曜日の昼間に孝弘はまた朱里のアパートにやっってきた。

「お腹いっぱいになったらちよっと眠くなってきたな。吉永さん、いいかな？」

「う、うん。……えへへ。里村君から頼まれるの、ちよっと嬉しい」

昨日の帰り際に次はいつ来てくれるのか尋ねられ、以前同様にいつでも毎日でもいいからねと告げられた言葉に甘えて連日お邪魔することにしたのだ。

それは朱里に膝枕してもらうことを、もっと正確に言うならば、朱里が上も下も服を脱いで下着姿を披露してくれることを期待していたからだだった。

それを表すように、いつもは朱里から誘ってきたのを今日は孝弘から願い出た。

「……わ、わりとはず、恥ずかしい、ね……」

そして朱里はその期待に応えてくれた。

初夏に入り日差しが熱く感じるようになってきたため薄手のブラウスにスカート姿だった朱里だったが、恥じらいながらもそれらを孝弘の前で脱ぐのを嫌とは言わなかった。

孝弘はゴクリと息を飲んだ。

胸を覆う白いブラジャーもパンティー同様に飾り気のないものだったが、楚々とした朱里のイメージにはあっていった。また、胸のサイズは服越しから想像できる範囲に収まり、けっして豊か

とか言えないものだったが、それでも十分女を感じさせてくれるもので朱里の魅力を損なうものではない。

朱里の体はけっして自己主張の激しいものではないが、こうして素肌のほとんどを晒した姿を目にすると全体的にバランスがとれているのがわかる。日頃目立たないだけ孝弘からすれば隠れていた宝物を見つけたような気分だ。

「へ、変じゃ、ないかな……？」

「いやうん、全然変じゃないっ」

「そ、そう……？ うう、あ、あんまりジロジロ見ないで……」

「あー、ゴメン。……でも恥ずかしがられるのは嬉しいな。俺、ひよっとして男として見てもらえてないんじゃないかって思ってた」

「そ、そんなことないよっ。里村君、お、男の子だよっ」

「いやー、でも普通は男の前でそんな恰好にならないだろ？」

「うえっ、さ、里村君がっ、脱いでって……言ったんじゃない……」

「確かに言ったけど俺は別に強制してないし、吉永さんがしたくないならしなきゃいいと思うんだけど。違うか？」

「そ、そうだけど……」

「つまり吉永さんが脱ぎたいから脱いだってことだろ？」

「……え……そう、なのかなあ？」

「嫌だったら服着なよ。で、もうこんなことしたくないって言えばいい。そしたら俺だって脱いでなんて言わないから。ほら、早く」

一度は訝し気に首をかしげた朱里も孝弘にこう畳みかけられると途端に慌てだした。

「い、嫌じゃないよっ、本当だよっ」

朱里にとって一番嫌なのは孝弘に見限られることだ。だから孝弘が気分を害したと感じれば機嫌をとることを優先してしまう。

「ど、どう？ み、見られるのも、ぜっ、ぜぜ、ぜんっぜん、嫌じゃないよっ」

なんて強がって見せ、もじもじと胸元を隠していた腕も後ろに回してどうぞ見て下さいと言わんばかりの立ち姿になった。

もともと服を脱ぐ名目は孝弘に素肌を見せるためではなかったのだが、そういったことには頭が回らないようだった。

「……………」

「え、えへへ。そ、それじゃ、膝枕、だよね…………？」

孝弘の視線が熱を帯びたことを感じたのか、朱里がじっと立っていられた時間は短かった。危険を感じたというよりも恥ずかしさが勝ったのだろう。脚を伸ばして床に座り太腿をぼんぼんと叩いて孝弘に「どうぞ」と促した。

「……………じゃ、遠慮なく」

これで3度目の膝枕だ。そして今回は孝弘から望んだもの。最初から遠慮するつもりもなく、促されるままに朱里の太腿を枕にして床に寝転がる。その際、顔の向きは真上を向くようにして目を閉じた。

「吉永さん、このまましばらく寝ちゃってもいいかな？」

「ど、どうぞどうぞ。そのための膝枕だよ。こ、子守歌でも唄おうか…………？」

「それはいいや」

「あう……………」

子守歌を断られたことに朱里は少し肩を落としたが、目を閉じた孝弘の穏やかな表情を見て気持ちをやや和らげ、優しく髪をなでて嬉しそうに笑みを浮かべた。

「吉永さんは」

「あ」

「どうしてこんなに色々してくれるんだ？」

「あ、えと、里村君に喜んで欲しいから……かな？」

「そっか。じゃあ例えば……こんなことして、大丈夫？」

「ひゃっ」

孝弘の手が朱里の素足に触れ、軽くなであげた。朱里は一瞬驚いて身を震わせた。

「んっ、く、くすぐりたい、よ……」

「こういうのはダメ？」

「だ、ダメじゃないけど……」

「いいんだ？　ありがとう」

「あうう……」

困り顔の朱里だったが明確な拒否はしなかった。そして次に孝弘が何をしてくるのかをドキドキしながら待っていたが、予想に反して孝弘はそれからは何もしてこなかった。手の動きを止めてゆるやかな呼吸を繰り返す。

「……ね、寝ちゃった、かな」

安堵の息を吐く朱里。

しかし孝弘は瞼を閉じたまま起きていた。動きを止め寝たふりをしだしたのは朱里のことを考えるためだ。

——吉永さんがどこまで許してくれるのか追及したい……！

これまでの付き合いで朱里の性格はだいたい掴めてきた。押しに弱く相手の要望をたいてい飲み込んでしまう他人につけ込まれやすい性格である。本人も時に強引なところを見せるが、自己

主張が強いというよりも拒絶されることを恐れてのもので、その本質は奉仕精神に近いものだ。

この他人につけ込まれやすいという点が孝弘の掲げる最大の免罪符となる。

朱里がいつかどこかの誰かに利用されて辛い目に合わないよう、今のうちから孝弘が朱里のそういうところをつまびらかにして朱里に警告してあげるという大義名分ができた。

これから朱里に色々と要求していったって、朱里が音をあげたり怒り出すところまでいけば、そこで彼女を諭せば良い。「吉永さんが簡単に相手の要求を聞いてしまうから相手をつけあがらせるんだ。これに懲りたら次からはもっと気をつけなよ」と。

完璧である。

孝弘にとっては完璧な計画であった。

続きは製品版でお楽しみください